

松原闘牛場

闘牛は「bullfighting（牛の闘い）」と訳されることがありますが、「bull sumo（牛相撲）」、または「bull wrestling（牛レスリング）」とするほうがより正確です。南ヨーロッパや南北アメリカで見られるような牛と人間の対戦とは異なり、闘牛では牛と牛を闘わせ、相手を押し倒すか逃げ出して降参させるよう仕向けます。島の人口の一割以上にあたる 3,000 人もの人々が、毎年徳之島の一番強い牛を決める三大試合を見にやってきます。

歴史的な起源

闘牛は日本の場所にも存在するものの、奄美と沖縄の島々では闘牛の伝統が特別な熱意を持って存続されています。徳之島における闘牛の重要性は簡単には言い尽くせません。闘牛は、徳之島が 17 世紀に鹿児島藩の薩摩藩の過酷な支配下に置かれた後、島の人々にとって娯楽と気晴らしの一種として始まりました。農閑期の間、農民は気を紛らわせる手段として各自の牛を闘わせました。長い年月とともにこの闘いは非常に人気となり、優勝した牛を訓練した人は多大な名誉が与えられるほどでした。今日、飼い主が道やビーチで自分の大事な牛を運動させているのがよくみられます。

体重別階級

牛には横綱(grand champion)や大関(champion)など、相撲にちなんだ番付がされています。最も体重が軽い牛は 700kg 前後で、重い牛では 1,100kg を超えることもあります。牛の名付けは時代とともに変わってきました。昔は、牛は飼い主の名字を名乗っていました。しかし、高額化する費用のため、近年では牛は通常地元の団体に所有されており、より派手やかな呼び名がつけられています。

ぶつかりあい

牛がサポーターたちに伴われ、太鼓、口笛、ラッパ、拍手や声援の中を直径 20 メートルのリングに入場するところから始まる大きな試合の雰囲気は、熱気にあふれ賑やかです。トレーナーはそれぞれの牛のそばにとどまり、おだてたりけしかけたりして取組に全力を出させます。数十秒で決着がつくこともあれば、20 分以上も取組が続くこともあります。勝敗が決すると、勝ったほうのサポーターたちがリングに駆け込み、若い男たちは勝利を祝って牛の背に飛び乗ります。

リアルな部分 (The real thing)

闘牛は、人間と牛が闘うマドリッドやメキシコシティの闘牛に比べるとはるかに血生臭くないものの、これらの力強い獣がぶつかり合う際、怪我は避けられず、また死んでしまう可能性も否定できません。トレーナーも時折怪我を負います。闘牛は、全ての人の好みに合うわけではありませんが、奄美群島の中でも徳之島でしか体験できない島文化のリアルな一部を表す見せ物です。

行き方

地元の人々によってつくられた松原闘牛場は、空港から海岸沿いを通って車で 10 分以内の距離にあり、

駐車場も利用できます。複数の試合が行われるイベントの入場料は 2,000～3,000 円で、子ども料金は 1,000 円です。